

2022年度おやさと研究所特別講座「教学と現代」

『元の理』を描く」報告

金子 昭

3月25日、天理大学第1会議室を会場にして、おやさと研究所2022年度特別講座「教学と現代」（天理総合人間学研究室、天理ジェンダー・女性学研究室共催）が開催された。今回のテーマは「『元の理』を描く—生命・ジェンダー・芸術—」。講師は日本画家の村田和香氏。村田氏は天理教少年会海外版絵本『OYASAMA』を作画したことで知られている。コメンテーターは同志社大学嘱託講師の金子珠理氏である。3年ぶりに全面的な対面開催の講座となり、約70人が参加した。

「元の理」は天理教の世界・人類創造の物語であり、これまで様々な学問分野から探究がなされてきた。親神による泥海の中からの人間創造は、まさに「愛と苦心」の賜物であり、「生命（いのち）の委細」の物語である。村田和香氏は、美術表現を用いて「元の理」の新たな「読み解き」を行った。それは村田氏による「みえててみえん世界」への挑戦である。

今回の講座の元になったのは、2022年9月に開催された村田氏の個展「いのちのいさい」展（おやさとやかた南右2棟）における「元の理」を題材とした全30枚の連作絵画である。村田氏は、5年間を費やしたその制作過程と全30枚の作品の内容について、「元の理」の教理に即しながら解説し、参加した多くの天理美術ファンを喜ばせた。会場には、参考として「いのちのいさい」展で展示した全作品の複製が並べられ、また会場入り口には、「元の理」を曼荼羅様式で描いた新作「いのちのいさい」も展示された。

これら30枚の作品は、大きく3つの段階に分けられている。第1の段階は、原初の世界である泥海のカオスの中から、月日親神が人間を創造する際に、様々な水中生物に託して人間の雛型と道具を揃えていく姿である。ここは「かぐらづとめ」の意義を伝える「つとめの理話」として、天理美術で従来、最も力点が置かれてきた箇所でもある。しかし、村田作品は、さらに「元の理」の全プロセスの表現に挑んでいく。

第2の段階は、身の内の天然自然の働きを10に分け、一手一つのたすけ合いの中で、最初に生み出された「いのち」が成長と出直しを繰り返す過程である。この「いのち」は五分（1.5cm）で生まれ、九十九年ごとに三寸（9cm）、三寸五分（10.5cm）と、1回、2回の出直しを繰り返し、四寸（12cm）に成人した時に直していき。この3度目の出直しの際には、母なる「いざなみのみこと」もまた子等を含めて残らず出直してしまう。ここでは、出直しと誕生が二つ一つであることが示されている。

第3の段階では、めくるめくダイナミックな時の流れが展開される。「いのち」は虫鳥畜類と八千八度の生まれ変わりを経て、最後に残るのが「めざる一匹（一人）」。「この胎内に男女各5人の人間が宿った。そして、そこでもまた人間は五分から生れ、五分ずつ成人していく。八寸（24cm）から一尺八寸（54cm）、三尺（90cm）、そして五尺（150cm）に成人したとき世界は整い、人間は陸上の生活を行う。「元の理」は人間と世界の共進化過

程でもある。この間、九億九万年は水中の住居、六千年は知恵の仕込み、三千九百九十九年は文字の仕込みと教えられる。人間はこうして海から陸へ上がり、火を発見し、文字を持って文化を未来に伝えていくことになるのである。

「元の理」の全プロセスをここまで丁寧に辿った絵画作品は、ほとんど初めてと言ってよいかもしれない。村田氏は、「元の理」を暗記するまで何度も読み込み、時には路傍講演を行なったという。「元の理」の教学関連書はもちろんのこと、胎児の具体的な成長過程や、道具となる生き物に関する多くの科学的文献を繙く中から、突如として閃くイメージを絵筆を持って具象化した。こうして制作された30枚の連作絵画を通して、村田氏は、「元の理」が愛の物語であること、そして我々人間一人ひとりがみな陽気ぐらしプロジェクトを担う一員として「陽と気に生きる」ことを訴えた。

それを受けて、金子珠理氏は、「元の理」が「なる」（生成）の物語であることを、教祖とほぼ同時代の西洋の思想家（ニーチェ）や科学者（ダーウィン）を引き合いに出し、比較思想的に考察した。さらに、テイヤール・ド・シャルダンやホワイトヘッドがエコロジカル・フェミニスト神学（R. R. リューサー）に与えた影響を踏まえつつ、天理教エコロジー神学の可能性について言及した。

また「芸術とジェンダー」の視点から、村田氏が所属する「グループ台」（1993年結成のようぼく女性美術家の集まり）の活動に関して、1970年代から始まったフェミニズム美術史の見解を参照しながら、その意義と可能性について考察した。

最後に「信仰・生活・芸術」の関係性をめぐって、宗教社会学の見地から、「寺族」などの「聖職者の配偶者」問題および「宗教の社会貢献」が内包する問題に言及した。そして、教内に通説として残る「女は台」が、本来は「女も道の台」であることを再確認した。

芸術創造の内的時間構造を考えると、華道、茶道、武道といった「道」のつく「準芸術」に特徴的に見られる「求道性」を踏まえ、天理美術の本質が「求道」にあるのではないかと指摘した。その後、活発な質疑応答も行われた。

今回の講座は、講演者とコメンテーター、そして主となる企画者が、すべて女性であるという点においても意義があったと言える。

※今回の「教学と現代」の内容は、おやさと研究所のホームページにて動画配信中です。ご視聴ください。



「教学と現代」開催の様子